

トは地図上で見ないとわからないかも知れないがデナリ南壁手前にそびえるカヒトナピークを経由してカシンリッジに至る長大な尾根なのである。これを11日間攀じ名付けたルート名はThe Linked Casin 同ルートを目指し帰らぬ人となった山田=井上ペアに対する想いや盗難騒動で絶体絶命だった彼らに手を差し伸べて呉れた北米のクライマー達の温かな気持ちを表したものだ。最後に山頂手前で体調を崩した仲間に優しく出来なかった自分を反省しチームワークが大切かつ重要なと語ってくれた。

■ ネパール／チョパバマレ峰(6109m) 第2登

〈East ridge tumiki 初登攀報告〉

当委員会の常任委員でもある馬目弘仁(まのめひろよし)講師が報告した山はパマリ山群(ロールワリン山群、ガウリサンカール峰の西方、中国との国境付近の小さな山群)で、カトマンズからわずか3日間でベースキャンプに入れるというアプローチの良さだが比較的最近に解禁された山で2019年に初登頂されただけで情報はほとんど無く静かなところである。

こちらもアクシデント！が発生ベースキャンプを設営して間もなく熊が出没してテントは破壊され食料もそこそこ失ってしまったのだ。この時には正直遠征は終わったという感じだったと言うが、色々と議論を経て登山を続行。

メンバー4名のうち3名で11月10日に登攀を開始、4日目に登頂し直ぐに下降開始、5日目の11月14日にベースキャンプ着となった。この山の選定として①冒険的に楽しめそうな地域と山②登山記録が少なくて新ルート開拓の余地がある③約1ヶ月の登山期間④トレッキングパーキッシュョンで登れる(費用が100万円以内)という事でピッタリの山だったようだ。

■ パキスタン／ツイII峰(6523m) 西壁

〈Spider's Thread 初登攀報告〉メンバー3人

鈴木雄大(すずき ゆうだい)講師は2023年、2024年と、いずれもペルーそしてパキスタンと続けて6千m峰の高難度なルートを初登している20才代のホープである。

今回は昨年9月のツイII峰の話に先立ち6月のキタラフ峰(6036m)の報告もいただいた。

ペールアンデスは欧米人達がヨーロッパアルプスの延長として多数訪れており、初登のルートを探すというのは、まず考えられないはずなのに南壁から南稜そして南東稜へとつなげた5日間での初登攀を成し遂げた。途中15mもの大フォールをやったり、巨大マッシュルームを次々と超えて行くというクレイジーだが素晴らしいクライミングをした。帰国後1ヶ月強でパ



キスタンに渡り次の目標は表題のツイII峰西壁。高度差1450mの高難度の岩壁を3日間で登頂し山頂でビバーク。同ルートを23ピッチ程の懸垂下降、その後クライミングダウンで氷河に降り立ちベースキャンプ着は夜の11時過ぎだった。

■ 国内／冬季のリッジクライミング

富山县在住の和田一真(わだ かずま)講師は自宅から100キロ圏内の山、時に北アルプス、白山と頸城山塊(くびきさんかい)の戸隠周辺の山を紹介してくれた。これらの山々を皆さん知っていますか?…①笠ヶ岳・穴毛谷第一尾根 ②黒部別山・南尾根 ③赤沢岳・西尾根南稜第二グランド ④戸隠山・九頭龍山右稜 ⑤白山・三方崩山東面…全てご存知ならかなりのツーでしょう!

更にこれらのルートからの継続登攀など色々なコースを紹介頂くが、もはやかなりの難題であった。とてつもないマニアックな話です。

日本の山、とりわけスノーリッジコースも未踏を含めまだまだあるのかと! 目からウロコだった!

■ トークセッション：リッジクライミング・その難しさと魅力

講師全員にお願いをした。各自5~10分程自分の登山感など語って頂いた後、馬目氏の進行で今回はほとんどがリッジクライミングであったので、その難しさと魅了について話を進めた。利点として落石や雪崩が少ない事、欠点は登りだけでなく下りが多々あったり、とにかく登らないと先もわからないケースもあり、その上真下に下れないので敗退もしにくく、場合によつては山頂まで行かないと下山も出来ないハイリスクを伴なうとの事で登山本来の楽しさになりうるかもと。

登攀技術は道具と共に進化し岩壁を登るのは大昔より容易になったし岩壁はルートを読むのが比較的楽である。今こそ冒険的なリッジクライミングがアルピニズムの原点なのではないだろうかと・・・まとめたいところだが講師の方々は自分達が好きに登れば良いのではとか、リーダーは計画書の中だけでメンバーのコミュニケーションが大切であると、高難度のクライミングをこなすクライマー達が言うのは逆に新鮮であつたし、馬目氏は最後にあえてまとめをせず終了した。

閉会は岩崎同委員長の挨拶で締めた。

今回の参加者は一般30名、リモート45名、講師及び役員16名。 国際・AC委員会常任委員 笹原芳樹

港区立高松中学校 ボルダリングウォール 完成記念セレモニー＆体験会

開催日時：2025年6月8日(日)10:00～12:00
開催場所：港区立高松中学校内クライミングウォール

2025年6月8日(日)、港区立高松中学校に新設されたクライミングウォールの完成を記念し、オープニングセレモニーおよび地域生徒向けの体験イベントが開催されました。当協会(公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会)は、港区教育委員会からの委託を受け、本イベントの運営支援を実施いたしました。

本事業は、港区がスポーツクライミングを通して子どもたちの体力、特に「指の力」の強化を目的に取り組む中で、スポーツクライミングの魅力を地域に広く伝え、施設の積極的な活用を促進するものとして実施されました。

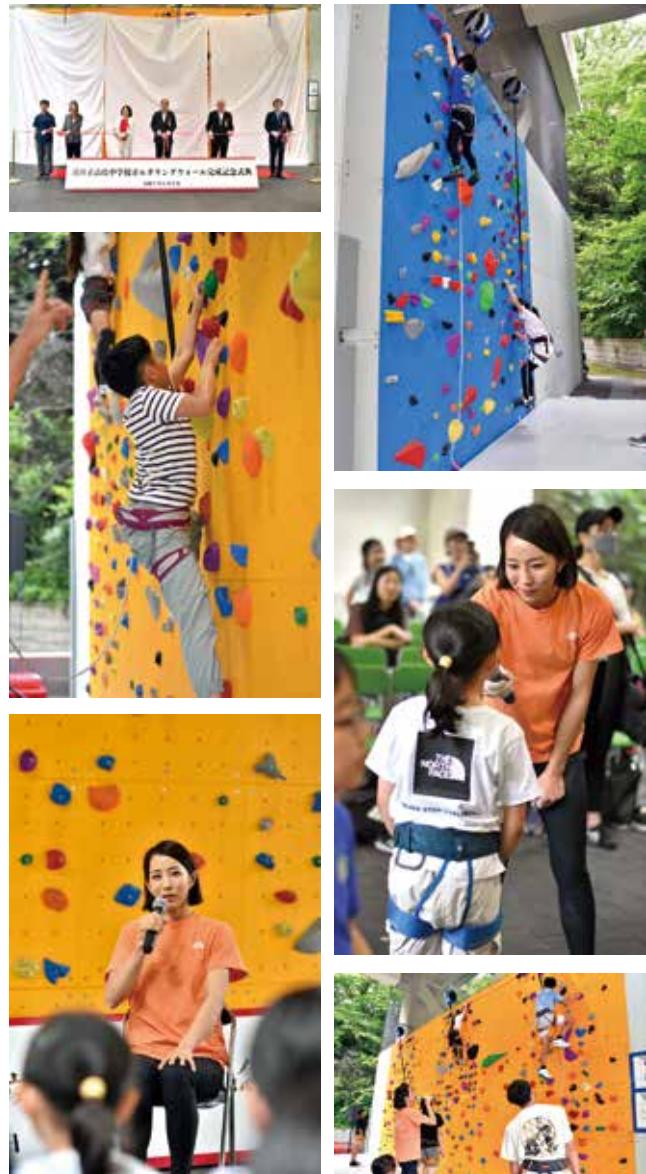
セレモニーには港区および学校関係者25名が招待され、体験イベントには小学校4年生から中学1年生までの生徒約45名が参加しました(予定60名中、欠席者15名)。保護者を含め、当日の来場者は約100名にのぼりました。当初、参加枠は30名を予定していましたが、募集初日に定員を超える応募があり、急きょ募集枠を拡大するほどの人気イベントとなりました。

特別ゲストとして東京2020オリンピック銅メダリストの野口啓代氏をお招きし、トークショーおよび体験会の講師を務めていただきました。トークショーでは、クライミングを始めたきっかけやその魅力について語られ、参加した子どもたちは熱心に耳を傾けていました。体験会では、野口氏が一人ひとりに優しく丁寧なアドバイスを行い、参加者は何度も果敢に挑戦していました。

また、東京都山岳連盟所属のユース選手が補助スタッフとして参加し、参加者と年齢の近いロールモデルの存在が、子どもたちにとって良い刺激となりました。体験回数は延べ約120セッションに達し、「楽しかった」「安全に楽しめた」といった声が多数寄せられ、施設活用への期待が高まりました。

なお、公的事業における式典業務を当協会が事業として請け負うことは、今回が初めての試みとなりました。しかしながら、大会運営経験の豊富な経験を有する藤枝競技委員会副委員長にディレクションを依頼したことでの円滑な対応が可能となりました。

本業務は4月末に受託が決定し、非常に限られた



準備期間の中での実施となりましたが、藤枝氏は多数のJMSKA主催大会を受け持つ多忙な中でも、4月から5月にかけて複数回の事前打ち合わせやりハーサルを行い、台本作成・備品手配・保険加入・指導方法の確認など、万全の準備を整えてくださいました。

また、今回の事業が成功裏に終了できた背景には、赤尾事務局長や伊藤事務局員による迅速な事務処理対応、原田SC普及委員からの貴重なアドバイス、さらに公益社団法人 東京都山岳連盟および東久留米山岳連盟の多大な協力があったことをここに付け加えさせていただきます。

当日は安全管理体制の徹底のもと、全体の運営を円滑に遂行いたしました。本事業を通じて、地域におけるスポーツクライミングの認知拡大と教育的活用への可能性が大いに感じられました。今後もこうした取り組みを通じ、青少年の健全な育成とスポーツ振興に貢献してまいります。

(SC普及委員会委員長 栗田季慎子)

2025年度山岳レスキュー講習会 (無積雪期・西部地区) 報告

遭難対策委員長 服巻辰則



2024年6月20日(金)～22日(日)に富山県立山町の国立登山研修所にて、山岳レスキュー講習会(無積雪期・西部地区)を開催した。昨年に引き続き6月の開催となった。今年は、屋外の人口岩場や体育館は利用できたが、研修所の施設改修工事の都合で宿泊室等の一部の施設は引き続き利用できないため宿泊や一部の講習は近くの富山県山野スポーツセンターを利用した。北陸地方は梅雨入りしていたが梅雨の中休みにあたり、三日間とも好天に恵まれた講習となった。

今年の講習は、従来のクラス構成に加え、岩場のセルフレスキューで使用するロープワークの基礎を徹底的に学ぶクラス2を新設した。

講習会参加者数は、クラス1(受講生7名)、クラス2(受講生2名)、クラス3(受講生8名)、講師・スタッフ等(11名)の計28名となった。この他、クライミングレスキューシミュレーションを行なうクラス4も設定していたが、応募者が少なく催行中止とした。

クラス1は、登山医科学委員会の協力を得て、ファーストエイドを中心とした講習を行い、初期評価から応急処置を学び、搬送やビバークの判断、実践まで広く学ぶコースとなっている。

クラス2は、岩場におけるセルフレスキューで使用する技術についてロープワークを中心に技術やギアの特性を理解できるように講習し、介助懸垂下降を習得目標とした。

クラス3は、リーダーレスキュー技術の習得を目指し、各技術の習得からシステム全体の習熟を行い、最後はシミュレーション実習を行なった。



感想(クラス1・東京都 木村俊介)

初めてJMSCAの講習に参加しました。

視覚障害者と山を歩く会で活動する中、「いざという時に備えたい」との思いが強まり、実践的に学べるこの機会を選びました。講習では、怪我や病気に加え、危険生物への対応など幅広いリスクに触れられ、どれも現場に即した内容でした。外科医と国際山岳看護師という頼もしい講師陣から、実体験を交えた具体的な話を聞けたことも、大きな学びでした。最終日の総合シミュレーションでは、緊張感のある中で考え、動く経験ができ、大変有意義でした。今回得た知識と技術を、今後にしっかり活かしていきたいです。

感想(クラス2・埼玉県 橋本昭子)

今回の講習会は山岳会の先輩に勧められ受講しました。山岳会に入会する前も様々な講習会に参加してきましたがセルフレスキューに特化した講習会は初めてでした。2泊3日の日程で繰り返し練習したことで一連の技術のひとつひとつの動作の意味を理解することができました。今回は参加者が少人数だったので個々に対応してくださり、最終日は自分の不安な技術をリクエストして実施することができました。今回学んだことがいざという時に自然と行動に出るよう今後もこのような講習会に参加していきたいと思います。また宿泊ならではの夜の情報交換会もほかのクラスの受講生と交流したり講師陣と語らったりとても有意義な時間でした。

感想(クラス3・新潟県 笠原大地)

今回の講習会を終えて感じたのは、引き出しが増えて成長できた、ということでした。私の職業は消防士で、管轄は山間部もあり山岳救助事案が多いことから受講させていただきました。普段は整った装備のもと、部隊で活動するため、本講習会のように救助のための資器材もマンパワーも劣勢の中活動するということはあまり経験がなく、消防の現場とは少し違いますが、その分非常にいい経験になりました。またクライミングで使用する資器材や結び方も勉強になり、理解が深りました。

講師の方々も非常に丁寧に教えてくれるため、クライミング初心者の方でも気軽に受講できると思います。また宿泊施設の料理もおいしく過ごしやすかったためさらに有意義な講習会になったと感じました。